

第一問

- (一) 病者と治療者、病者と家族という一方向的な結びつきではなく、病の中で生き抜くための情報を共有し、互いに生を支え合う相互的な関係性。
- (二) 精神障害者から社会を守ろうとする社会を軸に置いた論理から、障害者と共に生き、地域で集散的に支える共同的なケアの論理に移行すること。
- (三) 医療における選択の論理は、医師の提供する情報に基づき、自身の望む医療サービスを個人の責任で主体的に選ぶことを意味するということ。
- (四) 病者とともに生き、適切に状況を判断しつつ、感覚や情動に基づいてその人の身体を調べようとするケアの論理は、近代の個人主義や社会中心主義の思想を超えて、病者とその周囲の人や物とを共同的で協働的な関係において捉える新たな世界認識を生むということ。(二二〇字)
- (五) a || 診察 b || 諦 c || 羅針

第二問

- (一) アⅡ物寂しいので、女房達に賀茂祭を見せてやろう  
イⅡいったいどこの誰が横取りしようかとお思いいになつて  
ウⅡ「一緒に見物しよう」と申し上げなされたので
- (二) 源中納言方の人々が道頼方から要請された車の移動を渋った。
- (三) そちらの主人道頼様は一条大路も全て占有なさろうとでもいうのか
- (四) 当方の源中納言をそちらの中納言道頼と同列に扱うなどということ。  
道頼を、権勢を笠に着て横暴を働く恐ろしい人物と。
- (五)

第三問

- (一) a Ⅱ 上位の者に信頼されて  
d Ⅱ 現状より良いものはない  
e Ⅱ 悪弊を正そうとすれば
- (二) 才能に自信のない凡庸な君主は、一気に物事を推し進めようとしなから。
- (三) 一時的に効果をあげるより、子孫にまで成果を残した方がよい。
- (四) 目先の効果があらわれない改革を、自身を信頼していない民に対し、性急に実施しても成功しない、ということ。

第四問

- (一) 自分でも拙さを隠せない絵を贈るに際して、慣れない絵の不出来を自らの病気のせいと釈明することで、漱石の寛大さを頼もうとしている。
- (二) 三色しか使われておらず、花一輪、蕾が二つ、葉が九枚という簡素な図が白を背景に描かれ、その上、寒色である藍で表装されていたから。
- (三) 俳句では軽々と自在に作品を作り上げる才能をもった子規が、こと画作に関してはその才を発揮できなかったことをむしろ好ましく思ったから。
- (四) 生前には俳句の才に溢れ、およそ拙と無縁だった彼の形見の絵がいつそもつと拙ければと述べることで、亡き子規への追慕の思いを込めている。